シリーズ 戦争とラジオ〈第1回〉

国策的効果をさらに上げよ

～同盟原稿はどう書き換えられていたのか（前編）～

メディア研究部　大森淳郎

本シリーズは，「放送の公共性とは何か」という問題意識を基底に置きながら，当事者の証言や新たな史料によって，戦時中から占領期にかけてのラジオ放送について検証してゆく。以下の3点において新しいものにしたい。

1）日本の放送は，その出発から制度として「政府の管掌」下にあったから，戦争協力はいわば当たり前で仕方がなかったとされてきた。しかし，本シリーズはその「仕方がなかった史観」を乗り越えて，軍・政府の方針を，放送現場が内面化し，ニュース・番組に具現化していった過程を重視する。

2）1945年8月15日に実線を引かず，講和条約までを射程に入れることで，戦前・戦後の連続と非連続を検証する。

3）シリーズの展開と並行して新たな史料発掘を行い，随時，取り込みたい。

第1回は，戦時ラジオ放送におけるニュース編集を取り上げる。自主取材ができなかった時代，ニュースは同盟通信社の配信原稿を「話し言葉」に変換していただけと言われてきたが，遺された史料を詳細に分析すると，より国策に沿うように様々な書き換えが行われていた事実が浮かび上がってくる。

シリーズのはじめに

1. ラジオ少年

筆者がETV特集「戦争とラジオ―放送は国民に何を伝えたのか―」（2009年8月16日放送）の取材で高橋映一（当時82歳，2016年死去）を訪ねたのは2009年4月のことである。高橋が戦時中のラジオ放送を自作の録音機で記録・保存していると耳にしたからだった。

戦前・戦中のラジオ放送の音源はNHKにもわずかしか遺されていない。敗戦時に，大量の録音盤が文書類とともに徹底的に破棄・焼却された[1)]ためである。東京・内幸町の放送会館は1週間にわたって濛々（もうもう）たる黒煙に包まれたという。

今，NHKに遺る音源は，当時レコード盤に加工されたものだけである。表面が柔らかい素材でできている録音盤は，本来度重なる再生や長期保管には不適であり，重要な録音は外部の会社に委託してレコード盤に加工し保管されていたのだが，その一部が破棄を免れ遺されたのだ。しかし，その数は限定的であり，内容も政府や軍首脳の演説，あるいは初期の勝ち戦の戦場録音等に限られ，日々のニュースや定時番組などはない。さらに言えば，それらは厳密には放送の記録とは言えない。マイクが拾った音をコードでつながった録音機に直接流し込んだものであり，空間に放たれた電波を受信機が捉えたものではないからだ。放送とは文字通り，電波に変換した音を空間に放ち送ることである。その意味でも，戦時中の放送電波を受信し今に伝える高橋の記録は，貴重なものに違いなかった。

高橋は横浜市郊外の市営住宅の5階に夫人

と2人，ひっそりと暮らしていた。

「階段がきつかったでしょ。おかげですっかり出不精になってしまって」。玄関の扉を開けた高橋は，そう言って私を迎え入れてくれた。高橋の部屋には，電気機器メーカーを勤め上げた技術者らしく，プロ仕様のアンプやチューナー，スピーカー等が所狭しと並べられ，複雑に結線されていた。

高橋がそれらオーディオ機器の端にある頑丈そうな木箱の蓋を開けると，古めかしい，不思議な装置が現れた。一見レコードプレーヤーのようで，ターンテーブルとトーンアームがある。カーテンレールを利用して作ったらしいアームは，基盤にセロハンテープで固定されたマッチ箱の上に置かれていた。だがこの手作りの装置は，やはり普通のレコードプレーヤーではなさそうだ。ターンテーブルの上には細いパイプが渡されていて，そのパイプ上を金属製の小さな箱がスライドできるようになっている。よく見ると，その箱の底部からもレコード針のようなものが突き出ていた[2)]。この装置こそが，高橋が戦時中に自分で作り上げた録音機に違いなかった。

「今も使えますよ」と高橋が言った。「今日，あなたがお見えになるので試しておきました」。高橋が40センチ四方の機械には不釣り合いに大きいスイッチレバーを上げると，木箱の縁から延びる蛇腹式の金属棒の先の裸電球が点灯し，ターンテーブルが鈍い光沢を放った。

「今日はこれでやってみましょう」。そう言って高橋は，傍らにあったCDをターンテーブルの中心に固定した。CD? 訝る私を愉快そうに見ながら高橋はターンテーブルを指で回した。はじめだけ手動で勢いをつける必要があるらしかった。そして，ターンテーブルのスイッチをオンにして回転が安定するのを待ってから，金属製の箱をCDの端にスライドさせて針を光沢面に落とした。

「何かしゃべってみてください」。高橋はヘッドホンをかぶると，私に録音機につながったマイクを向けた。

「えー，ただいま，高橋さんの家で自家製の録音機を見せてもらっています。何やら不思議な機械です。えー，本日は晴天なり，本日は晴天なり――」

針が糸くずのような物をはき出しながらCDの光沢面を削ってゆく。高橋は糸くずの塊が針の進路を妨げないように，時々指で除いた。針が通過した部分は光沢を失い，白っぽくなっている。

「じゃあ，聴いてみましょう」。高橋は金属製の箱を上げ，代わりにトーンアームをマッチ箱から降ろして，その針をCDに落とした。

「えー，ただいま，高橋さんの家で……」。ノイズとともに，間の抜けた声が再生された。驚く私の目の前で，往年のラジオ少年の笑顔が弾けた。

2. 遺された音

高橋は幼い頃から機械いじりが好きだった。寺の住職だった父親が手回し式の蓄音機で落語や浪曲を楽しんでいたが，高橋の興味は音の内容よりも音が出る仕組みに向けられた。やがて芝浦の東京高等工芸学校電気通信専修科に進学，ラジオやアンプの組み立てに熱中した。高橋が生まれる2年前の1925（大正14）年，その学校の図書館の一画に作られた仮放送所から，日本放送協会に統合される前の東京放送局が電波を送出し，日本のラジオが産声を上げた史実も，高橋のラジオ技術への関

心を一層高めたのかもしれない。やがて受信機だけではあき足らず，録音機を自分で作ってみたいと思うようになったが，録音機の仕組みを解説する一般書があるわけでもなかった。高橋が頼りにしたのは日本放送協会の技術部だった。「NHKさんがね，時々放送機材の展示会をやっていたんです。そこに出かけては勉強させてもらったんです」。

日本放送協会が初めて自局で行った録音を番組に使用したのは，1936年10月，神戸港沖の観艦式の実況放送の時だったが[3]，その後，録音技術は急速な発展を遂げ，太平洋戦争の頃にはニュースや番組の中で盛んに活用されていた。高橋は展示された録音機の構造を頭にたたき込み，自作に挑み始める。川崎の軍需工場で働きながら，部品を買い集め試作を繰り返した。

「なかなかうまくいきませんでした。やっと音が出たと思っても音質が悪すぎて。昭和18年頃から本格的に始めたんですけど，なんとか形になったのは昭和19年になってからでした」

CDの表面を削って私の声を録音した装置は，当時のものを母体にして改良を重ねてきたものだった。「もちろんCDは代用品です。丸くて削れるものなら何でもいいんですよ。本当はこれを使うんです」。

高橋は，箱の中に納められた黒い円盤を示した。円盤はLPレコードに見えるが，手に載せてみると意外な重さがある。

「芯はアルミなんです。アルミ板の両面にアセテートという薬品が塗布されているんです。この録音盤ばかりは自分では作れませんから，NHKさんに卸している業者さんから買っていました。当時はCDみたいにちょうどいい代用品もなかったですから」

録音盤は，全部で10枚ほどあった。もともとは数十枚あったのだが，ほとんどはひび割れてしまい処分したという。残っているものの中にも，縁の部分のアセテートが溶けて再び固まり，溶岩のように波打っているものがあった。録音盤の中心にはラベルが貼ってあり，当時，高橋が書いた文字がかろうじて判読できる。〈サイパン島　S 19.7.18　17時〉〈大本営発表 比島東方海面・レイテ沖〉〈空襲警報〉……。

戦時中でも音楽番組や寄席の中継もあったはずだが，そういう種類の録音は高橋のコレクションにはない。録音して保存しておくなら，普通はそっちではないだろうか。なぜ，高橋は戦局関連のニュースや大本営発表を選んで録音していたのだろう。

「録音ができるようになった時が，もう昭和19年の夏でしたからね」。高橋が私の問いに答えて言った。「サイパンが陥落した頃です。いったい日本はどうなるんだろうって思っていました。最後には神風が吹くんだって教えられていたけど，本当に大丈夫なのかって。とにかく普通の状態ではないわけですから，『これはっ』ていうニュースは残しておこうと思ったわけです」。

高橋は1枚の録音盤を手に取って続けた。「ラジオを録音することに何か後ろめたいような気持ちもあったんです。個人が勝手に録音していることが警察にわかったらまずいんじゃないかってね。変ですよね。堂々と放送しているものなんだから，それを録音したって隠すようなことじゃないですよね。でも，あの頃はどうしても後ろめたい気持ちがあって，だから録音しても誰にも聴かせませんでした」。

実は高橋は，やはり自家製の受信機でアメリカ軍の日本向け短波放送VOA（ボイス・オブ・

アメリカ）も聴いていた。録音機を自作する高橋にとって短波受信機を作ることはいとも容易なことだった。当時，短波放送を聴くことは固く禁じられていて，発覚すればただでは済まないことは高橋にもわかっていたが，好奇心には勝てなかった。生家の寺の薄暗い部屋の隅で，高橋はラジオのスピーカーに耳をつけた。

「日本はもう完全に負けているって放送しているんですよ。大本営発表とはまるっきり違うんです。まさか日本が負けるとは思っていませんでしたけど，もうサイパンも失っていましたからね」

そうは言わなかったが，高橋は日本の敗戦をおぼろげに予感していたのではなかったか。日本放送協会の放送を録音することに後ろめたさを感じていたのは，VOAを聴いているやましさの自覚と重なってのことだったろう。もっと言えば，日本放送協会の放送を自分は100パーセント信じることができない，その戸惑いこそが，高橋が感じていた後ろめたさの正体だったのかもしれない。

録音盤をターンテーブルに載せながら高橋が言った。「これはね，昭和19年の秋に放送された特別番組の録音です。最後の部分だけですけど聴いてみてください」。

針を落とすとザッ，ザッ，ザッと波打つような雑音がしばらく続き，やがて合唱が始まったが，歌詞は不鮮明で聴き取れない。まもなくその歌にかぶせてアナウンサーが次のようにコメントして番組は終わる。

決戦の時は来たれり。起て一億。私どもはこの歌を声高らかに唱和するとともに，傷痍軍人，並びに遺家族の方々に感謝し，飛行機・食料の増産活動。不撓不屈の信念を持って，米英撃滅。勝利の日まで，勝利の日まで戦い抜く。勝ち抜くことこそ，真の決戦援護であり，皇国護持に笑って散った将兵や同胞に応える道であろうと存じます。起て一億の夕べ。日比谷公会堂よりの中継を終わります。

高橋によれば，この特別番組は『『起て一億』の夕』と題され，サイパン島陥落からおよそ3か月，“天王山”と位置づけられたフィリピン・レイテ島の決戦が迫る中で放送[4]されたものだった。録音盤から再生されるのは，当時日本中の人々がラジオから聴いた音そのものだった。人々はどんな気持ちでこの中継を聴いたのだろう。放送を出す側にはどんな意図があったのだろう。

「NHKさんがね」と針を上げながら高橋が言った。「NHKさんが企画に参加して，日比谷公会堂から中継したんですよね」。

タイムカプセルを開いたような不思議な気分に浸っていた私は，まだ回転を続けている録音盤から目を上げた。高橋は穏やかに微笑んでいた。遠い昔に自分が録音した音にNHKの人間が興味を示すことを，素直に喜んでくれているのに違いなかった。しかし，私は一瞬こう問いかけられた気がしたのである。「事実上負け戦が決まっていた時に，こういう放送を出して国民を煽っていたことについて，あなたは今，NHKの人間としてどう考えるのか」と。

3. 戦争とNHK

国民の戦意を昂揚するうえで大きな役割を担った戦時ラジオ放送は，1926年に設立された社団法人日本放送協会によるものであり，1950年に放送法に基づいて再出発した現在の特殊法人日本放送協会，NHKによるものでは

ない。しかし，NHKは旧協会の一切の権利・義務を継承して設立されたのであり，職員もそのままだった。旧日本放送協会に戦争責任があったとすれば，それはNHKによって継承されるべきものであることは言うまでもない。

新聞社や通信社は敗戦直後にその紙面で自らの非を認め，その後も自社と戦争との関わり・責任を繰り返し検証してきた[5]。しかし，NHKがそれを行ったことは未だにない。戦後，4度にわたって公刊された『放送史』は，戦時ラジオ放送にも多くのページを割いてきたが，あくまで通史の一部としてであり，戦争責任の自覚と検証という問題意識で貫かれているわけではない。なぜ，新聞や通信あるいは雑誌メディアが行ってきたことを，放送メディアはしないで済ませてきたのだろうか。

その答えを先取りするように，作家・広津和郎は1935年，すでにこう記している。

「半官半民のこの財団（ママ）法人の成り立ちから考えたって，今更これが反動化したなどと騒ぎ立てるのは滑稽な話だし，放送局に進歩的役割を，今のこの情勢の中で注文するというのは，注文する方が無理である。この御用機関は，時の権威者によって利用されるように大体出来ていると見るのが，当然な話であると私は思う[6]」（旧仮名遣いを新仮名遣いに，旧字体を新字体に改めた。以下の引用も同様）

放送事業はその出発の時から無線電信法によって「政府之ヲ管掌ス」とされ，担当官庁である逓信省の指導・検閲下にあった。1926年，東京・大阪・名古屋の3放送局が日本放送協会に統合された後は，協会の上層部は逓信省の出身者で占められるようになっていった。広津の言う「この財団（ママ）法人の成り立ち」である。そして「今のこの情勢」とは，1931年に満州事変が勃発して以降，軍・政府がメディアへの締めつけを強めつつあった時代状況を指していた。放送協会が軍・政府寄りの放送を出すのは「当然な話」ではないか，というのである。

この広津の戦時ラジオ放送に対するある種しらけた見方は，戦後においても一般的だったのではないだろうか。旧日本放送協会は1945年の敗戦に至るまで戦争協力を訴える国策的な放送を行ってきたが，それは協会の成立過程・時代状況からして当たり前だったのであり，そこには例えば新聞社や雑誌社のように「抵抗と挫折の物語」があるわけでもない――。

それは，再出発したNHK自身の歴史観でもあった。戦後，『ラジオ年鑑』が最初に発行されたのは1947年だが，その巻頭にある「事業概観」は戦時ラジオ放送を次のように総括している。

「日本の放送は常に政府の代弁機関として存在し，かつて政治的批判，言論の自由を認められたことはなかったが，『満州事変』以来，外部から加えられた重圧は，放送は国策に順応し，これを推進させるものでなければならぬという声であった。特に『日華事変』以来放送が広い視野と幅のある思想を持つことは全く不可能となった。太平洋戦争の勃発は，こうしたわが放送の性格を否応なしに軍と政府の御用機関として規程した[7]」（傍点は引用者）

戦争協力は，「外部から加えられた重圧」のためだったのであり，協会に責任があったわけではない。戦争協力は仕方がなかったのだ――。

表面的にはその通りだったかもしれない。だが，ここに止まっている限りは，戦時ラジオ放送の経験から学び，現在の放送に生かすことはできないだろう。夜空に浮かぶ月の表面は鏡

のように平らに見えるが，実際には数千メートルの山々がそびえるクレーターだらけのでこぼこの世界だ。戦前・戦中の日本放送協会の歴史を遠望すれば，逓信省や情報局に支配され戦争遂行に利用された，非自立的で没個性の，のっぺらぼうのような組織の姿しか見えない。でも，もっと接近して見れば，放送現場の絶望や葛藤，あるいは諦念といった感情の起伏が見えてくるのではないだろうか。そして政府・情報局の指導を放送現場が，いつのまにか内面化し，ニュース・番組に具現化していったプロセスが浮かび上がってくるのではないだろうか。

現在の価値観から戦時ラジオ放送を断罪しようというのではない。いわば「仕方がなかった史観」を乗り越えて戦時ラジオ放送を検証すること。戦時中のラジオが何を放送したのか，単にその事実を羅列するのではなく，現場が何をどう考えて，あるいは考えることを放棄して放送していたのかを検証すること。それがメディアに対する，とりわけ放送メディアに対する圧力が高まっている今日，重要なのではないだろうか。

本シリーズに言う戦時ラジオ放送とは，狭義には「放送の全機能を挙げて大東亜戦争遂行に挺身[8)]」した1941年12月8日から1945年8月15日までの1,347日間の放送を指すが，満州事変，日中戦争の時代にもしばしば言及することになるだろう。戦時ラジオ放送は，太平洋戦争の開戦とともに突然始まったのではなく，日本と世界の間の軋轢・緊張の中で次第に形作られていったものだからである。

また，本シリーズでは敗戦後の占領期の放送も広義の戦時ラジオ放送として考察する。太平洋戦争が法的に終わるのは1952年4月の講和条約発効によってだからであるし，放送法に基づくNHKの再出発までを射程に入れることで，戦時ラジオ放送と戦後の放送との間の連続と非連続を考えたいからである。それは「放送の公共性とは何か」という，今日なお新しい問題と向き合うことにほかならない。

扱う主な史料は，NHK放送文化研究所及びNHK放送博物館が所蔵する一次史料群と，筆者が2009・2010年にそれぞれ制作したETV特集「戦争とラジオ」「敗戦とラジオ」の取材で収集した史料及び証言記録である。また，既述したように戦時ラジオ放送の史料は，敗戦時に焼却処分されたために限定的である。それを補うために，「放送台本」や「戦中日記」等，戦時ラジオ放送に携わった元職員の自宅に眠る史料の収集を，本シリーズの展開と並行して行ってゆきたい。

先行研究のうち最も重要なものは，太平洋戦争期のラジオ放送を研究した『戦争と放送』『史料が語る太平洋戦争下の放送』等，竹山昭子の一連の著作である。また，占領期のラジオ放送については松田浩の『ドキュメント放送戦後史Ⅰ』がある。竹山・松田両氏には前記番組の制作時にも，その著作からのみならず，直接大きな教示を得た。このシリーズも，両氏の研究に学びながら展開してゆくことになるだろう。NHKディレクターとして三十余年番組制作に携わってきた筆者がやるべきことは，両氏の研究よりもさらに一層，戦時ラジオ放送の現場に軸足を置いて考え，記述することだと思っている。

敗戦から70年以上が過ぎ，現在のNHKには戦時ラジオ放送に直接携わった人間はいないから直接的な戦争責任はないとしても，戦後責任は今もある。戦後責任とは，「戦争遂行に

挺身」した過去から学び，常に自己検証を怠らないことである。戦時ラジオ放送は「70年も前の」ではなく，「70年しかたっていない」先輩たちの物語なのである。

第1回
国策的効果をさらに上げよ
同盟原稿はどう書き換えられていたのか（前編）

シリーズ第1回は，ニュースに焦点を当てる。戦前・戦中，日本放送協会は独自の取材は行っておらず，ラジオニュースの素材はそのほとんどが国策通信社「同盟」からの配信原稿だったことは広く知られている。そして，協会のニュース担当課[9]が行っていたのは「書き言葉」を「話し言葉」に変換することにすぎなかったと理解されてきた。だからであろう，例えば『日本放送史』は次のように記している。

「ニュースソースは，政府のあっせんと協会の大口出資のもとに生まれた国策的な通信機関，同盟通信社からの提供によるものであり，したがって時局関係ニュースの内容には，多かれ少なかれ，国家の情報宣伝政策にもとづく国家意思が加えられ，国民はニュースをきくことによって，時局に動員されていたともいえる[10]」

国民を「時局に動員」したのは国策通信社の同盟であり放送協会ではないと言っているのに等しいが，果たしてそう言い切れるだろうか。ここには，前述した「仕方がなかった史観」が典型的に潜んでいるのではないだろうか。

日本放送協会は同盟からの配信原稿を話し言葉に変換していたにすぎず，だから当時のニュースが国策寄りだったとしても仕方がなかった――。

しかし，わずかに遺された放送ニュース原稿を子細に検討すれば，それが半分の真実でしかないことがわかってくるのである。

1. ある報道部員の回想

日本放送協会が発行していた雑誌『放送研究』1941年12月号は，太平洋戦争開戦の関連記事を掲載することにぎりぎり間に合った。そのグラビアページには「AK報道部の活動ぶり」というキャプションがついた写真がある。部屋の中央に置かれた大机を10人ほどの男たちが囲み，背後には大きな世界地図が掛けられている。手元の原稿を見つめている男たちに笑顔はなく，部屋の空気は張り詰めている。

「ああ，懐かしいなあ。これこれ，これが私ですよ」

中央で受話器をとる中道定雄
『放送研究』1941年12月号

持参した写真のコピーを示すと中道定雄（2009年当時90歳，2011年死去[11]）は，大机の中央に陣取って座り受話器を握っている若者を指さした。周りの男たちはずっと年上の者ばかりだが，若者に臆する気配は微塵もない。強い意志を感じさせる写真の若者と，呼吸器

障害を患い，酸素吸入のチューブを鼻に装着した目の前の老人は簡単には結びつかない。整った鼻梁にわずかに面影が残っていた。

中道は1941年，早稲田大学文学部卒業と同時に日本放送協会に入局，業務局報道部編集課に配属された。天気予報から始め半年後にニュース担当となったが，中道のニュース担当としてのキャリアは短い。開戦からひと月あまり，1942年1月に応召したからだ。中国で敗戦を迎え，戦後NHKに復職，芸能畑を長く歩きテレビ文芸部長を経て名古屋中央放送局長，芸能局長を歴任した。NHKを定年退職後は，中道風迅洞の名で都々逸を創作，『どどいつ入門』等の著作がある。戦時中の話を聞こうとする私に中道は，「最新作は“あれはいつかと折る指無駄よ”っていうんだよ」と言って笑った。

1941年12月8日，非番で東京・中野の自宅にいた中道は，ラジオの臨時ニュースで太平洋戦争の開戦を知った。「開戦必至という空気は，すでに局内に漂っていましたからね。でも，それがいつかは誰にもわからなかった。だから非番の日でもラジオはつけっぱなしにしていました」。

中道は局に駆けつけ，そのまま3日間泊まり込んだ。握り寿司が大きな桶で2日間続けて差し入れられたことを妙に鮮明に覚えている。その寿司をほおばりながら，中道は開戦直後の数日間，ほとんど寝ずに働いた。疲れを感じる暇もなかった。

「混乱といえば大混乱ですけど，ある意味，実に簡単明瞭でしたね。要するに，軍と政府が発表する情報を忠実に流す，それが最優先だったわけですから。目的は一つ，戦地に赴く兵士を激励すること，そして銃後は一致団結してお国のために尽くすというかね」

中道は，若き日の自分の姿にもう一度目を落として続けた。「当時，僕が書いた原稿でね，覚えているのが二つある。一つは，この戦争の呼称を大東亜戦争とするという発表，もう一つは帝国海軍がプリンス・オブ・ウェールズを撃沈したニュースだ。この二つはよく覚えていますよ」。

戦争の呼称の決定や，イギリス艦隊の撃滅，どちらをとってみても記者になったばかりの若者が書く記事ではないだろう。だが既述したように，当時の日本放送協会では独自取材はほとんど行われておらず，ニュースは同盟通信社から送られてくる原稿を放送用に書き直すだけだった。中道に言わせれば，それは“記者”ではなく，業務局の“報道担当編集者”だった。22歳の中道が，プリンス・オブ・ウェールズ撃沈のニュース原稿を出稿することに何の不思議もなかったのだ。

「要するに，同盟通信から送られてくる原稿を，文語調から“ですます調”に直すわけです。よく言われたのは，『中学校2年生を念頭に置いて，その理解に耐えるように書き直しなさい』ということでした。ただし，大本営発表については例外で，一字一句たりとも加筆改正はせず，もうそのままスルーでやることになっていましたね」

1枚の写真から始まった思い出話は，巧(たく)まずして私が最も聞きたかった点に近づいていた。中道を訪ねる前，私は雑誌『放送研究』1942年4月号に掲載された「編集者の内省」という，報道部員によるコラムを読んでいた。コラムは，ニュース編集といっても同盟の原稿を「話し言葉」に直しているだけではないかという声があることを認めたうえで，問題は自分たちの次の

内省にあるとしていた。

「同盟通信以上のニュースを常に聴取者に提供しているかどうか。（中略）同盟通信を使っても同盟通信以上の国策的効果があがればよい。それがなければ結局我々の仕事も同盟通信の単なる取次と見られても仕方がないのではないか。（中略）我々編集者は常に同盟通信以上の効果をあげるために工夫し努力しなければならぬ[12)]」

この「田中」という署名があるコラムは驚きだった。戦時中のラジオニュースは，同盟の配信記事を「書き言葉」から「話し言葉」に書き換えていたにすぎないという一般に流布した言説を，私自身も信じていたからである。田中は「同盟通信以上の国策的効果」を上げなければならないと言う。しかし，それは具体的にどういう作業だったのだろうか。それを知るために，戦時中，ラジオニュースに携わっていたOBを探してたどり着いたのが中道だった。

「田中さん，覚えていますよ。先輩です」

コラムのコピーを読んで中道は言った。いつのまにか中道の膝には，虎縞模様の猫が乗っていた。「うーん，だけどどうかなあ。田中さんは，同盟通信の取り次ぎと見られても仕方がない，とお書きになっているけれど，そう言うなら仕方がなかったんですよ。田中さんも同盟の記事にないものを付加するとは書いていないでしょ。ですからこれは田中さんの願望として読むべきじゃないかな。私は同盟の記事に形容詞や，あるいは何か別の一語を書き加えて，何か国民の士気を鼓舞するというような細工をした覚えはありませんし，周りの諸先輩もそこまではしていなかったと思います」。

田中の言う国策的効果とはどういうことだったのか，私はなお聞いた。

「何が国策的かといったら，要するに国民を戦争の遂行にいかに協力させるかということに尽きます。当時は私たちも全くその渦中にいたわけですから。でもだからといって同盟の原稿に，何か感情をかき立てるような文章を追加させたかといえば，その記憶はありませんね」

話しているうちに中道は一つの実例を思い出した。

「何の原稿だったかは忘れましたが，ある時私が同盟の原稿をリライトしていて，『イギリスの旗がひらめいていた』と書いたんです。そうしたらある先輩が，『君，ここは一つユニオンジャックと書こうじゃないか』と言ったんですよ。横文字は原則として避けることになっていたのですが，言われてみればイギリスの旗よりユニオンジャックのほうがインパクトがありますよね」

「それは，ユニオンジャックのほうが敵愾心を煽るという意味ですか」

中道は少し苛立ったようだった。その膝から虎縞が飛び降り，部屋の隅のキャットタワーを駆け上った。

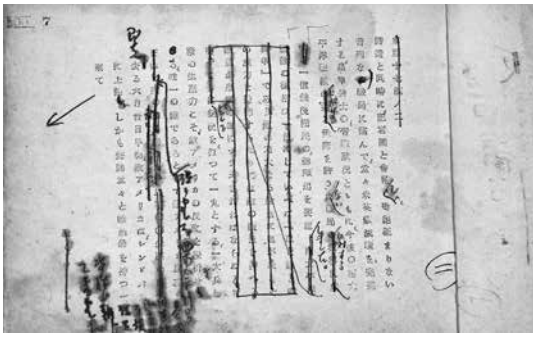
「そりゃ受け取り方の問題だな。私が言いたかったのは，そのほうが響きがいいというか，外国語はすべてダメというような硬直したリライトじゃなかったということだ」

これ以上は聞けそうもなかった。コラムが書かれた1942年，中道はすでに中国に出征していたわけだから，厳密には田中のコラムの意味について言及する立場にないし，中道が携わった開戦直後のニュースは，音源はもとより原稿も遺っていない。空間に放たれたまま消えてしまう放送は新聞と違って検証のしようがないのだ。

2. 遺されていたニュース原稿

戦時中のラジオニュースの放送原稿の一部が，NHK放送博物館の収蔵庫に保管されていることを知ったのは，中道に話を聞いた1か月後だった。戦時ラジオ放送に関する史料について相談に乗ってもらっていた学芸員が，「ニュース原稿も，ほんの少しですけどあるんです」と教えてくれたのだった。

それは1943年9月1日から4日，さらに9日，13日の計6日分（13日は一部のみ），およそ600本の放送用ニュース原稿（以下，放送原稿と記す）だった。なぜ，この原稿だけが焼却処分を免れて遺ったのか，その経緯は不明である。



1943年9月1日の放送用ニュース原稿（部分）
（NHK放送博物館所蔵）

原稿は2種類に大別できた。一つは同盟の配信原稿（以下，同盟原稿と記す）そのものに手を加えたもので，所々が万年筆の線で消されていたり，逆に手書きの文字で加筆されたりしていた。加筆の筆跡はそれぞれの原稿で異なるから，複数の報道部員によって行われたのだろう。もう一つは同盟原稿とは別の紙に活字または手書きで記された放送原稿で，元になった同盟原稿は存在しない。全体のおよそ4割を占める前者は時間的余裕がないため，やむを得ずそうなったものだが[13]，重要なのはこちらのタイプだった。原稿が放送用にどう書き換えられたのかを比較検証できるからだ[14]。

あらかじめ断っておかなければならないが，ここで言う比較とは，同盟原稿と放送原稿の比較であり，事実と放送原稿のそれではない。そして事実と国策通信社「同盟」の原稿の間の差に比べれば，同盟原稿と放送原稿の差は小さなものかもしれない。だが，当時の報道部員たちは，その小さな書き換えに自らの仕事の意味を見いだそうとしていたのである。そこを丁寧に見てゆかなければ，私たちは再びあの「仕方がなかった史観」に回収されてしまうだろう。

報道部の田中が言う「同盟通信以上の効果をあげるために」行った工夫や努力とは，どんなものだったのか，遺されたニュース原稿から浮かび上がってきた。

〈事例1〉

「九月一日 后九・〇〇放送」の朱印が押された放送原稿から見てみよう。「同盟　東亜一七号　レンドバ，ニュージョージア戦　〇〇参謀談」という同盟原稿が元になっている。ソロモン諸島中部の日本軍防衛ラインの攻防戦を視察した参謀が，記者団に語った談話である。

あらかじめ，戦闘経過を概観しておこう。ニュージョージア島（現ソロモン諸島領）の沖に浮かぶ小島レンドバにアメリカ軍が上陸したのが1943年6月30日，わずか140人の日本軍守備部隊はたちまち潰滅した。同日からニュージョージア島を舞台に，アメリカ軍と日本軍との間で激しい攻防戦が繰り広げられることになる。日米両軍に膨大な戦死者を出す激戦だった。やがて制空権を失った日本軍は8月上旬には劣勢となり，9月末にはニュージョージア方面の放棄を余儀なくされた[15]。

ニュース原稿に戻ろう。参謀がニュージョージア島の前線を視察したのは「八月〇日」と日付は伏せられているが，すでに日本軍の劣勢が明らかになっていた時期だった。参謀は，日本軍の苦戦と敢闘を語りながら航空機の不足を指摘し，「銃後の団結」の必要を訴えている。

ところで，同盟原稿には数か所，線で消された跡があるのだが，線は文字を潰すほど太くはないので，削除された部分を読み取ることができる。参謀の談話は放送には長すぎ，部分的削除が必要なのは当然だとしても，削除の対象となった部分を読み取れば，そこには共通した傾向があることがわかる。それは例えば次のような部分である。

同盟原稿の削除部分（1）（1943年9月1日 配信）

> 戦線の様相は一言にしていえば「血と鉄との闘争」であり，敵の厖大なる鉄量に血が最もその威力を発揮するためには敵の鉄量を押える鉄量が皇軍の血にプラスされねばならぬ。

同盟原稿の削除部分（2）（1943年9月1日 配信）

> （アメリカ軍は）近接戦闘では必ず敗れると意識しているので歩兵の近接を避けて，専ら物質戦闘，火砲の威力に頼っているのみである。だが，アメリカの歩・砲・飛の共同作戦は流石に巧妙で，その三者一連の進路は実に巧みに一つの陣地に向かって集中されて来る。これは彼等の特色で，こうして徹底的に叩いて日本軍の手足をずたずたに斬りさいなんで全体を弱めておいてから攻めてくる。
>
> （括弧内は引用者）

同盟原稿の削除部分（3）（1943年9月1日 配信）

> 敵の戦車がかってに縦横無尽に威力を振るっているのである。そして新たなジャングルを求めざるを得なかったのである。ここでは実に壮絶な鉄と血の闘いが繰り広げられている。われにもう少しの鉄があれば血の力で敵の鉄を圧倒することが出来るのである。だが残念ながら敵の戦車に圧倒されねばならなかった。

削除部分に共通するのは「血」であり，また「日本軍の手足をずたずたに斬りさいなんで」など，日本軍の苦戦を伝える部分である。聴取者に「銃後の団結」の重要性を訴えるために，参謀は彼我の軍備・物量の絶望的なまでの差，それ故の日本軍の悪戦苦闘を語るのだが，一方でそれは遠い南の島のジャングルで流される日本兵の鮮血を連想させずにはおかない。あまりに生々しい戦場の実相は，厭戦気分を醸成する危険があると判断されたのだろうか。

〈事例2〉

9月2日午後7時に放送されたニュース。アメリカ軍が南鳥島の日本軍守備部隊に空襲を加えたことを伝え，太平洋の戦いが本格的決戦の段階に達したことを意味するとして，国民に覚悟を求めている。同盟原稿と放送原稿を比べてみると，まず，この時点に至るまでの戦況が，次のように書き換えられている。

同盟原稿（1943年9月2日 配信）

> 南太平洋に於いては昨夏以来激戦に次ぐ激戦，決戦より決戦へと**次第にその様相を深刻にしつつある**が，これら挺身部隊の善戦によ

り我が南方諸地域に於ける建設戦は確実に進展し日一日と戦力増強の物資を供給するとともに同地域は大東亜の防衛の要塞として面目を一新しつつある。　（太字は引用者）

放送原稿（1943年9月2日 放送）

この方面に於ける我が軍は，昨夏以来激戦に次ぐ激戦，更には挺身部隊の善戦によって勇戦を続ける一方，建設戦を確実に進め日一日と戦力増強の物資を供給するとともに大東亜の防衛の要塞として面目を一新しつつある。

このニュースが放送された1943年9月には，日本軍はすでにガダルカナルを失い，ニューギニアでも敗退を続け補給もままならない状況にあった。それでも「同地域は大東亜の防衛の要塞として面目を一新しつつある」と強弁する同盟原稿も，国策通信社の面目躍如と言うべきだが今は問わない。繰り返すが，比較するべきは事実と放送原稿の差ではなく，同盟原稿と放送原稿のそれである。

さて，注目しなければならないのは，放送原稿が同盟原稿にある「次第にその様相を深刻にしつつある」という部分（それは，当局の検閲に対する同盟のぎりぎりの抵抗だったのかもしれない）を削除していることである。些細な省略と見えるかもしれないが，この部分に続く次の書き換えも含めて見ると，省略の意図が見えてくる。

同盟原稿（1943年9月2日 配信）

かかる状況に対し反枢軸陣営は漸く焦慮の色を深め過般のAP電は「一島の占領に半年の日時を浪費してしかも消耗も甚しく，この間日本は占領地の防衛陣を愈よ強化することになるから，かかる規模の反撃に代わるべき本格的攻勢をもって日本本土攻撃を敢行すべし」と主張し，米軍が現在南太平洋方面に於いて実施している「島より島へ」の作戦を非難している。この米通信社の論調は少なくとも米国の輿論の一部を代表していることは事実で今次のケベック会談以来急角度をもって太平洋第一主義論が米国の輿論となりつつあることを物語るものである。

放送原稿（1943年9月2日 放送）

かかる状況に対し敵側の陣営は漸く焦慮の色を深め，一部では「島より島へ」の作戦を非難し，この際，太平洋第一主義を煽りたてております。

同盟原稿からはアメリカが太平洋作戦の進行状況について，費やされる「日時」と「消耗」を問題にしていることがわかるのだが，そのことはAP電を削除した放送原稿からは伝わらない。先の書き換え，即ち「次第にその様相を深刻にしつつある」という部分の削除と相まって，ニュース全体の意味は大きく異なるものになっている。同盟原稿は，アメリカ軍が太平洋方面で漸進的に進んではいるが消耗も大きいこと，そのためヨーロッパ戦線よりもこの方面を重視し日本本土攻撃を目指すことがアメリカの輿論となりつつあることを伝えている。それに対して放送原稿は，日本軍の守備に阻まれて太平洋の島々を奪還できないことに焦ったアメリカが，太平洋第一主義に転換しようとしているか

のように読める。この意味の差は小さくない。文章の量を減らすためなら，他の書き換えの方法があるだろう。

同盟原稿の全体からは，日本軍が「善戦」しながらも，じりじりと後退していることが浮かび上がるのだが，放送原稿は，日本軍があたかも一島たりとも失わずに勝ち続けているかのように伝えていた。

この書き換えが行われた時と同時期の『放送研究』には，「思うこと」と題する報道部員・相場によるコラムが載っている。

「米機の北千島来襲と南鳥島の空と海からする襲撃に，いよいよ骨の髄まで決戦意識が振起された。報道編集者としての心構えも一点に向かって集中することが緊要とされ，毎日の戦況報道を編集するにも，些細な表現法にまで注意して我が戦局の力強さを伝える為に苦労する[16)]」

〈事例2〉の書き換えが相場によるものだったとは断定できないが，他の報道部員だったとしても「思うこと」は同じだっただろう。報道の現場は，「我が戦局の力強さ」という偽ニュースを本当のように「伝える為に苦労」していたのである。

〈事例3〉

次に見るのは9月2日正午に放送されたニュースである。元になっているのは，ストックホルム発の同盟原稿。ドンバス地区（現ウクライナ領）の交通の要所を占拠しているドイツ軍を，ソ連軍が包囲し要所を奪回しようとしているが激しい抵抗に遭い，作戦を変更したことを伝えている。その結論部分は次のように書き換えられている。

同盟原稿（1943年9月2日 配信）

> 赤軍もこれ以上，犠牲を無視してドンバス作戦を続行出来なくなる段階に達している模様で，他方面の新牽制作戦を狙って兵力の移動を開始したと伝えられる。

放送原稿（1943年9月2日 放送）

> ソヴィエト軍もこれ以上の犠牲を無視してドンバス作戦を続けることは出来ない状態であります。

両者の伝える「事実」はかなり異なる。同盟原稿は，ドンバス作戦に失敗したソ連軍が新たな作戦のために移動を始めたことを伝えているのに対し，放送原稿はドンバス作戦の失敗だけを伝えている。日本軍のガダルカナルからの敗退を大本営が「転進」と言い換えて発表したことはよく知られているが，ここではその逆の書き換えが行われていると言えるだろう。即ち，ソ連軍の転進をあたかも「敗退」のように書き換えていた。

1943年9月，ヨーロッパ戦線での枢軸側の劣勢はすでに明らかだったが，書き換えの意図は枢軸側の善戦を少しでも強調しようとすることだったろうか。

遡ること2年，日本放送協会報道部の西田貞一は次のように記していた。

「例えば現下のヨーロッパ各国の動向はなるべく国民に真実を知らせるべきであるけれども，英米やソヴェート等のその時々の動向等は，かなり重要な部分を削除するか，ないしは枢軸国側，或いは我国の立場からみて何らかの注釈を加えなければそのまま客観的に知らせ

るだけでは，非常に多くの聴取者を考える時不十分であると思われる事がある[17)]」

太平洋戦争下，西田の主張は，確実に実行されていた。

〈事例4〉

書き換えが行われたのは，戦況ニュースだけではない。次に見るのは9月1日午前5時半に放送された経済ニュースである。日本とその中国に於ける傀儡政権が，上海の綿糸布を強制的に買い上げて地方に放出し物価騰貴を阻止しようとしていることを伝えているのだが，放送原稿では，同盟原稿にある次の部分が線で消されている。

同盟原稿の削除部分（1943年8月31日 配信）

万一かかる目標の下に実施された政策が失敗に帰する如き場合は国府の政治力の軽重を問われることとなるばかりでなく極めて重大なる結果を招来する懼れがある。

削除の理由は明らかだろう。政策が失敗した時の責任の所在を明示することは，国策的編集においては避けなければならなかった。

〈事例5〉

次に挙げるのは，中国のアメリカ軍基地を日本軍が空爆したことを伝える9月3日午後3時のニュースである。放送原稿は同盟原稿に直接手を入れるのではなく，別紙に書き直されている。このタイプでは，放送原稿を元になった同盟原稿と比較することはできないのだが，この事例では例外的に同盟原稿が一緒に綴じられていた。同盟原稿はまず鉛筆で放送用に書き換えられ，さらに鉛筆とは筆跡が違う万年筆の文字によって修正が施されている。最初の書き換えを上司がチェックした痕跡だろう。

例えば，日本軍が空爆を加えた福建省建甌（けんおう）のアメリカ軍基地についての説明は，次のように段階的に変わっている。

同盟原稿（1943年9月3日 配信）

建甌は在支米軍が唯一の日本本土空襲基地として…

放送原稿（1回目の書き換え）

建甌は支那にあるアメリカ空軍が唯一の日本本土空襲基地として…

放送原稿（2回目の書き換え）

建甌は支那にあるアメリカ空軍が，わが本土に最も近い反攻基地として…

1回目の書き換えは「書き言葉」から「話し言葉」への変換と言ってよい。しかし，それでは不十分と見る別の目があったことを2回目の書き換えが示している。そこで問題にされているのは「日本本土空襲基地」という言葉である。アメリカ軍が日本本土を空襲するための基地を中国に持っていることは伏せるべきである，という判断だったろうか。

〈事例6〉

最後に見る事例はニュースの書き換えというよりは，ニュースとニュースの「つなぎ」と言うべきものである。

フィリピンで独立準備委員会が発足し，またビルマでは国家主席バー・モウが基本国策の大綱を発表したという海外ニュースと，日本国内の官庁や公共団体が率先して金属資源回収に協力するため火鉢や暖炉を使わないことにしたというニュースが，9月9日午後10時に放送された。一見，無関係に見える海外ニュースと国内ニュースを放送原稿では次のような文章でつなげている。

放送原稿・つなぎの文章（1943年9月9日 放送）

> 着々と独立国家の態勢を整えてゆくビルマ，一歩一歩と独立への歩武を進めてゆくフィリピン。斯くて大東亜共栄圏の建設は寸分のゆるぎもなく進められてゆくのであります。この様な状勢にあって銃後の私共も敵米英の野性を粉砕するため，勇戦奮闘しつつある皇軍将兵に対して心からの感謝を捧げ，勝つための生産陣への協力の誠を示すため，先ず官庁や公共団体は…

狙いは大東亜共栄圏の建設という「戦争目的」を，市民の日常生活と結びつけることにあったろうか。ニュース本文の書き換えではないが，これもまた「同盟通信以上の効果をあげるために工夫し努力し」た編集[18]の例である。

以上，「国策的効果」を考えたと思われるニュース編集，即ち同盟記事の書き換えについて見てきたが，そこには一定のパターンがあることがわかる。

一つ目は「隠蔽型」とでも言うべきものである。〈事例1〉に典型的だが，〈事例4〉も責任の所在を隠すという意味ではこの「隠蔽型」に入るかもしれない。

二つ目は「修正型」である。〈事例2〉〈事例3〉〈事例5〉がこれにあたる。「隠蔽型」との境界は微妙だが，事実の隠蔽というよりは，事実を修正して伝えることで国策的効果を上げているように見える。このような修正は，語句の小さな言い換えによってもしばしば行われていた。例えば，オーストラリアの経済の悪化を伝えるニュース（9月4日午後3時放送）では，同盟原稿はその原因の一つが「豪州兵は世界各地に**派遣された**」（太字は引用者）ことだとしているが，放送原稿は「オーストラリア兵は世界各地に**ばらまかれてしまい**」（同前）と言い換えている。このニュースでは，最後に「（オーストラリアは）アメリカの口車に乗せられてみじめな状態をつづけてゆくのであります」（括弧内は引用者）という一文を加え，修正の効果を高めている。

三つ目は〈事例6〉に典型的な「教訓型」である。他の例としては，南鳥島に飛来したアメリカ軍の爆撃機を日本軍守備部隊が対空砲火によって迎撃したことを伝えるニュース（2日午後7時放送）がある。同盟原稿は「現地部隊の勇戦奮闘は敵の反攻を挫折せしめ，洋上の孤島にあって本土防衛の第一線を厳として守り抜いている」と結んでいるが，放送原稿はそれを話し言葉に直した後，「私共一億も本土のまもりに万全を期したいと存じます」と書き加えていた。

同盟原稿と比較できた放送原稿は，1943年9月の6日分のうちの，およそ250本だったが，それだけでも田中の言う「同盟通信以上の効果をあげるため」の編集の痕跡を確認することができた。「放送の迅速・広範な伝播

力と，多数の人間を同時に把える直接性とは，放送をして思想戦に於ける不可欠の武器たらしめるに至った[19]」ことを考えれば，その「効果」は大きかったはずだ。

太平洋戦争の中で1943年9月が特別であった理由はないから，このようなニュース編集は戦時ラジオ放送の中で常に行われていたのだろう。

私は中道定雄に電話をかけた。放送用ニュース原稿では，中道が話した通り同盟原稿の文語調が「ですます調」に書き直されていた。しかし明らかにそういうレベルを超えた書き換えもある。私は中道を再訪し，この事実を提示したうえでもう一度話を聞こうと思った。だが中道は体調を崩しており，「質問は今，この電話でしてほしい」と言った。私は戦時中のニュース原稿を見ることができたこと，そして同盟の配信原稿の書き換えにあたっては一定の意図が働いていたように見えることを，具体例を挙げて電話口で説明したが，中道の答えは素っ気ないものだった。

「あなたの話では，そのニュース原稿は昭和18年のものですね。そうだとすれば自分には証言能力がありません。なぜならその頃自分はすでに出征していて中国にいましたから」

無理もない話だった。中道がニュース編集に携わったのは開戦直後，日本軍が快進撃を続けていた時だったから，同盟原稿に「隠蔽」や「修正」を加える必要はなかったのかもしれない。

「それでも体調が戻ったらニュース原稿を見てください」。そう言って私は電話を切った。

その後時が過ぎ，私は中道の訃報（2011年4月15日）を新聞で知った。

（おおもり　じゅんろう）※後編は9月号に掲載

注：

1）当時，録音番組を担当していた飯島陽三への筆者による聞き取り（2009年5月）。
2）カッターヘッドと呼ばれる部品で，電気信号に変換された音を物理的な振動に変えて録音盤に溝を刻む。録音機の心臓部である。
3）日本放送協会編（1951）『日本放送史』461頁
4）放送のおよそ10日前に確定した放送予定，「確定番組」（NHK放送文化研究所所蔵）によれば『「起て一億」の夕』は，1943年10月3日（火）午後6：30から放送されている。
5）例えば「太平洋戦争への道　朝日新聞」（朝日新聞1991），「新聞と戦争」（朝日新聞2007），「新聞と戦争」（毎日新聞 1994～1995），鳥居英晴（2014）『国策通信社「同盟」の光芒』花伝社等。
6）広津和郎（1935）「ラジオ雑感」『中央公論』1935年9月号
7）日本放送協会編（1947）『昭和二十二年ラジオ年鑑』5頁
8）「昭和十六年度事業報告」『理事会会報』NHK放送文化研究所所蔵
9）ニュースを担当したセクションは，戦前から戦中にかけて報道部ニュース課，報道部報道課，報道部編集課，報道部とその名称を変えてゆく。
10）日本放送協会編（1965）『日本放送史 上』299頁
11）インタビューは2009年5月14日，東京・中野の中道の自宅で行った。
12）「編集者の内省」『放送研究』1942年4月号
13）同盟原稿は通常，別の用紙に書き直されたが，間に合わない場合には，「躊躇なく書き直しを諦めて通信のプリントにそのまま手を加え，修正して放送に用い」た（「ニュース放送と用語」『放送』1939年1月号）。
14）同盟原稿は，その大半が敗戦時に焼却されているため，後者の場合，元になった原稿の内容を知るには，それが掲載された新聞を探すしかない。その場合でも，複数の同盟の配信原稿から1本の放送原稿になっているケースもあるので，同盟原稿と放送原稿の対応関係を特定することは困難である。
15）防衛庁防衛研修所戦史室編（1970）戦史叢書『南太平洋陸軍作戦〈3〉』他
16）「思うこと」『放送研究』1943年10月号
17）「放送ニュース概説」『放送』1941年5月号
18）ニュース本文の書き換え以外の編集としては，井上裕之（放送文化研究所）が，ニュースリードのつけ方について詳細な研究を行っている（「ニュースリードが消えた？」『NHK放送文化研究所年報2016』）。
19）日本放送協会編（1942）『昭和一七年ラジオ年鑑』1頁